The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	主観・客観・経験 : アドルノ哲学の射程について
Author(s)	河原, 理
Citation	年報人間科学. 1996, 17, p. 195-217
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11797
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

主観・客観・経験

――アドルノ哲学の射程について――

河原　理

〈要旨〉
アドルノの批判理論はしばしば、その文化産業批判の故にエリート主義として非難される。更にそれにとどまらず、彼の理論は時代遅れなものとして、あげつらわれもする。つまり、アドルノは主観－客観という枠組みから踏み出すことができない、というのである。そうした通例の批判に対する反論こそが本稿の目指すところである。
アドルノの文化産業批判の核心は単なる時代診断ではない。彼の議論は、「啓蒙」によって産み出された、カントから実証主義まで包み込むような問題構制を、弁証法的に微細に解き明かすことに基づいているのだ。そのような連関を踏まえた上で、アドルノが明らかにするところの、カントによる超越論的主観の基礎づけの二重性格は取り上げられることとなる。そしてこれをもってアドルノは、いわゆる主観の優位を突き崩し得るようなカント読解を試みるのである。
アドルノの議論運びは、周知のように、複雑極まる、一読しただけでは内容を把握すること困難なものである。為に、本稿では議論を「経験」という概念に局限したい。それというのも、アドルノはまさしくこの経験という概念の内で、彼特有の多義的な言い回しを用いて、「客観の優位」に出会い得、「和解」の可能性を感知し得るような道を探っているからである。

キーワード
Ｔｈ・Ｗ・アドルノ、主観、客観、経験、文化産業

本稿は、哲学者、社会学者にとどまらず、文化の問題域にまで踏み込んでその思想を展開したテオドール・W・アドルノ（一九〇三－一九六九）が我々に遺したものを吟味することにより、彼の批判理論の射程を探ってゆこうとするものである。彼の文化産業批判は、エリート主義として、ともすれば冷笑をもって迎えられたりもする。また彼が主観－客観という図式を固持する為に、現在では時代遅れであるとの論難もよく聞かれるところである。しかし彼の批判は現在では、まったく的外れなものとかたずけられてしかるべきものと言えるのか。この問いに、主に『否定弁証法』を中心に、彼の仕事を究明することで答えてみたい。

1. 主観と客観の逆転

アドルノによれば、主観と客観は、現代社会の中で、その「真の」姿とは逆転した形で現象している。アドルノの著作を読む場合、主観－客観という概念の中に、認識論的な意味での認識者とその対象というばかりでなく、科学的な意味での主観的－客観的という含みをも見て取る必要がある。この二項は、そうした重層的な意味を孕んだものであるということを我々は頭に入れておかねばならない。認識論的には、それは今述べたように、我れと我れに対するものである。すなわち、自我と対象である。科学的には、個人的であることと普遍妥当的であることである。すなわち、個人と超－個人である。認識において主観は確たるものとして保証されておらねば認識の真正さは保たれない。一方、科学においては、主観的であるとは、曖昧であるとの謂いであり、そのような主観的ファクターが厳しく排されることによって学的厳密さが保証されることになる。このように、一方で真正さの支点でありながら、他方ではまさにそれ故に厳格さを損なうものである「主観」。アドルノのテクストはこの相反する二項から紡ぎ出されており、一読しただけではその意図するところを読み解くことが困難である。そこでまず、アドルノの社会診断を概括しておこう。それにより、彼の思考の文彩が判然としてくるであろう。

アドルノは「主観と客観について」というエッセイにおいてこう述べている。「もちろんこれは観念論が最終的には承認するだろうことなのだが、超越論的主観はある意味で、諸々の心理的個人――そこから超越論的主観は抽象されたのであり、またそれらは世界の中でほとんど言うべきことのないものであるが――よりも現実的であり、人間の実際のふるまいとそれによって形成された社会にとってみれば、より規定的である」（GS10 745）。超越論的主観の方が経験的主観（心理的個人）より現実的であるというのは、「生きた」経験をする具体的な主観を排した（abstrahieren）「満場一致の事柄」（ND 172）を鸚鵡返しするだけの抽象的主観が広く世界を覆っているというアドルノの時代診断に拠っている。また、超越論的主観（一般に妥当するもの、超－個人）の方が心理的個人より規定的であるというのは、超越論的主観という統制的機能によってその満場一致になる筈の事柄が予め定められているという次第による。

だからこそこの世界の中でもはや言うべき心理的個人は消え失せてしまっており、人間のふるまい（Verhalten）は、現実の世界の中で抑制（verhalten）されているというのだ。そして現実の社会に存在するとされる超越論的主観が――それは普遍妥当的なものである筈なのだから――、「客観的」であることになる。

しかしここでの「客観的」というのは、アドルノにとってみれば、「主観的」なものである。それは超越論的「主観」の意味での、「主観的」というばかりではなく、むしろそれが胡散臭いものであるという意味でそうなのである。つまり先に見た、「科学的」パースペクティヴを採った場合に言われる意味での「主観的」なのである。普遍妥当的なものをアドルノは、通常の言い回しとは逆に、「主観的なもの」として呈示する。このような表現法を見究めて初めて、我々はアドルノの思想的核心に触れることができる。「あまりに主観的」であると反対を受けることは（真の意味での）「客観性」のメルクマールになるという発言（MM Nr.43）がなされるのも、抽象的主観の蔓延という批判的視点が在ればこそなのである。

このようにアドルノは、現代社会を主観と客観が逆転したものと診断する。そして、それに相応して彼は一般に言われる主観－客観をある時はそれに倣って、またある時はその逆の意味合いで用いる。もちろんそうした表現は、単なる皮肉に尽きるものではないであろう。では、そのようなパラドキシカルな言い種を通じて彼は何を言わんとしたのか。このような問いかけこそが、アドルノ思想の根幹への通路を拓くのだ。そして、アドルノの錯綜とした思索に分け入り、その核心に達する為の導きの糸となるのが、如上の逆転現象である。

ここでの議論の対象である主観と客観の逆転現象という主題は、かの悪名高き「文化産業論」の中軸となるものである。そこで次に、『実証主義論争』序文と『啓蒙の弁証法』を基に、この逆転現象を文化産業批判との関連において吟味しておこう。そうした考察を通じて、アドルノ思想の核心部に迫ってゆきたい。

2. 客観性による媒介

まず初めに言っておかねばならないのは、アドルノにとって、客観の主観への還元こそが実証主義を最もよく言い表す、ということである。そしてこれはカント哲学における、カテゴリーによる質料の包摂という思想をより過激にしたものとして捉えられよう。アドルノが文化産業として考えているのは、こうした還元を一般の「文化」のレヴェルで広く世に覆い尽くさせ、「客観的」なものとして蔓延るのを促進したものである。彼にとっては、カント哲学や実証主義と現代の文化産業とは連続したものなのである。この視角を見落とせば、彼の文化産業批判の起爆力は失われる。そして、そこに残るのは単に一定の芸術に対する嫌悪だけ、ということになる。

『啓蒙の弁証法』の「文化産業」の章に散見されるように、文化産業はジャズや映画によって代表されるとアドルノは考えた。しかし、それらが想像力を萎縮させ、感性を鈍麻させ、盲目にするとい

う彼の見解は、現代のジャズや映画に一律に当てはまるものではないであろう。エリート主義として一蹴されがちな彼の文化産業批判はしかし、このことによって、無視されてしかるべきものだとまで証明されたわけではない。彼の批判自身は、その核心において未だ妥当し続けているように思われる。では、彼の批判の潜勢力は、いかなる点で未だ有効であるのか。文化産業批判の射程はどこまで拡がっているのか。

『実証主義論争』序文においてアドルノが頻りに繰り返すのは、主観は常に既に媒介を受けているということである。何によって媒介されているのかというと、社会、全体性、哲学的にはUnwesenとも言われるものにである。

ここでアドルノの社会概念（同じことは全体性やUnwesenの概念についても言えるのだが煩瑣を避けて、ここでは社会を代表として述べるに留める）について一言を付しておかねばならない。それは、弁証法理論は「社会」というものを単独に取り扱うのではない、という点である。個人が社会によって媒介されているばかりでなく、社会が個人という成員から成っている限り、社会をそうした絡み合いから抽出してきて、それだけを分析しても意味がないというのが批判理論の視点なのだ。[1]実証主義社会科学との違いについて言うと、

この考え方（実証主義社会科学――引用者註）にとっては、社会というものは社会化されて社会的に行動する諸主体の静力学的につきとめられ得る、平均的な意識もしくは無意識のことであって、諸主体がそのなかで動く媒体のことではない。この構造の客観性――実証主義者たちにとっての神話的遺物――は、弁証法理論によれば、認識主観的理性のアプリオリである。認識主観的理性がこのアプリオリを解するとすれば、認識主観的理性はその構造をそれ固有の法則性において規定せねばならないのであり、概念的秩序の処理規則に則って自らの立場で仕上げてはならないだろう。（PS 14f.）

ここで言われる社会構造とは社会と個人の「間」で繰り広げられる事態（ザッヘ）そのものなのであり、つまりは「媒介」である。そしてこの媒介の内で起こることを見据えてゆくというのがアドルノの終始変わらぬ態度であった。認識主観の用意する図式に適うように素材を加工し、自らのカテゴリーの内で矛盾なきものとして象られた対象にだけ関わることをアドルノは断固として拒否する。[2]

こうした媒介を論究することこそが、文化産業批判の核心である。単に文化産業を批判するというのではなく、それを生み出し、それを促進させた背景を探ることにこそ文化産業批判の矛先は向けられている。それ故、この批判は、哲学的にはカント批判、マルクス主義的には価値論（使用価値と交換価値の区別）への言及を伴うものともなる。

先に、アドルノにおいては文化産業とカント哲学とが連続したものとして捉えられると述べておいたが、それは主観的能力の麻痺を助長させる文化産業と、その基盤となったカント哲学という関係で

示される。

カントのいわゆるコペルニクス的転回により、真理の後見人の座はカントの有名な「我れ思う」という超越論的統覚、すなわち超越論的主観に移された。問題は、「みずからを引き離して対象化する主観性が、自然の全体的女王を僭称し、支配関係を忘れてつけあがり、支配関係を支配者による被支配者の創造へと解釈し直した」(PS 30) ことなのである。ここでの支配関係とは自然によって支配される人間という形態の支配である。そしてその状態を脱け出す為に、人間は主観と客観の間に距離をとったのであるが、しかし自然支配から逃れるその方途は、人間が支配者となるために被支配者を作り出すというものであり、主観—客観関係で言うと、客観を対象化して概念的に処理することに繋がるものであった (vgl. DA 29f.)。「人間を自然の暴力から連れ出す一歩ごとに、人間に対する体制の暴力が増大してくるという状況」があり、「その不条理さが、理性的社会の理性を、陳腐なものにすぎないとして告発」(DA 56) している。理性的社会の理性こそが神話なのである。

しかし『啓蒙の弁証法』では、こうした状況がカント哲学の登場によって強固なものとなったとしても、その本質は早くもプレアニミズムから西洋に根付いていたとも述べられる。プレアニミズムは「概念と事態とを分離して客観として規定するやり方、つまりホメーロスの叙事詩のうちにすでに広くひろまり、近代の実証科学のうちで転化をとげる客観化的規定の原形態」(DA 32) なのだ。そして、ここでの「客観化的規定」が、カント哲学によって強化された同一性の哲学と言うことができる。それは「純粋内在の立場」に立つ、「抜け道のない永遠に同一の世界」として批判に晒されるものである。しかし彼の視角からすれば、この同一性に覆われた世界というのは、自然から距離をとることで、無理矢理もぎ取られたものなのだ。「それだけで存在する、「純粋な」、つまりみずからの生き生きした経験を疎外した主観」(PS 30) といった言葉がそれを表明している。そしてこの疎外された世界が、文化産業の蔓延する(超越論的主観が客観的となった) 現実世界の写し絵となっているわけである。

それ以上に、アドルノにとって重要なのは、主観性というものは、「本当はつねにまた客観でもある」(ebd.) ということである。「科学主義的分析が導く所与は、もはやそれ以上遡及不可能であるという——認識批判的に要請された——最終的な主観的現象はそれ自身が、主観へと還元される当の客観性の貧弱な模像なのである」(PS 40)。客観としての主観については後に論ずることになるのでここでは、アドルノが実証主義における主観概念を批判するにとどまらず実証主義がそのような主観を実体化しているとまで論を進めていることを指摘するにとどめる。[3]

マルクスについて言えば、文化産業に搦め取られることの宿命的、不可避的性格を解明する為の基礎的思想をアドルノに付与した者としてその名を挙げることができよう。アドルノが次のように語る内には、マルクスの影がある。ひとは「主観的に〈利潤動機〉によって導かれているかどうかにかかわらず、没落したくないならば、抽

象的な交換法則に服従せねばならない」(PS 21)。

マルクスにおいては、「交換」ということで分析されたのは次のようなものであった。すなわち、使用価値と交換価値が切り離され、交換可能なものとなる為には量的なものとして労働が捉えられねばならない。そしてその結果、商品に物神的性格が貼り付くことから物象化が起こる。つまり、マルクスにおいて等価交換は、特殊資本主義形態の内で現れ、物象化を惹き起こす元凶であるとされているのだ。しかし、アドルノがしばしば言及する等価交換にはマルクスとの決定的な差異が存在する。それは、アドルノにおいて、そうした事態が人類の原史から存在しているとされる点である。それ故、カント哲学以前に、神話時代より以前から既に、啓蒙の弁証法は始まっているのだ。

> 質を消去すること、つまりその機能への換算は、合理化された労働様式を通じて科学から一般大衆の経験世界へと伝染する…。今日の大衆の退歩は、自分の耳をもって聞こえがたいものを聞き、自分の手をもって把えがたいものに触れることができない無能さのうちに現れている。これは新しい眩惑形態であり、征服された各種の神話的眩惑にとって代わるものである。人間は…互いに平等な、たんなる類的存在にされてしまう。互いに話をすることのできない漕ぎ手たちは、工場や映画館やコルホーズでの近代の労働者と同じく、誰も彼も同じ拍子(クタト)につれて動くように拘束されている。…労働者の無力は、たんに支配する者の謀略だけではなくて、…この産業社会の論理的帰結なのである。(DA 53f.)

文化産業というものは、「啓蒙」の現代的形態として示される。主観と客観をさかしまにするのは、等価交換による量化に起因する、個人の平均化である。そして、こうした状況に入り込むことが強制されているというのが我々の現況だというのが、アドルノの診断である。「もし没落したくないならば」そうした渦に巻き込まれざるを得ず、主体的な意志を持つことが稀薄となる個人は文化産業にますます搦め取られてゆく。これが先に述べた、自然による支配から逃れる為に人間の内に支配ー被支配関係を移転することが、逆に人間に対する暴力に転化してしまうという啓蒙の弁証法の「不条理さ」なる問題構制における宿命的性格を言い表しているのは言うまでもない。

欲求の主体は「生産諸力の技術状況によって初めてというばかりでなく、生産諸力が機能する経済的諸関係によっても」(PS 21)予め形成されているというマルクスの遺産を継承しながら、哲学的に考察し、認識主観の実体化を厳しく批判するアドルノ。彼の中では、マルクス主義と哲学が底流している。そしてこの二つの流れは「主観と客観の逆転」という主題において交差する。

アドルノが主観と客観の逆転現象について論述する際に心に留めていたのは、社会には眩惑連関が広く行き亙っており、それを「文化産業」が強化するということだけではないのである。それは、主体の確立の問題、つまり主体が主体として確立されるといってもそ

れがいかに歪められた形で、しかも不可避的に行われているのかという問題を提起するものでもあるのだ。それは、現代の時代診断ばかりではなく、主体の成立史にまで視野に収めて、そうした歪曲を余儀なくさせた元凶を探ろうとするものなのである。それ故、現代の「文化」における時代診断としては全面的に肯定できないまでも、文化産業批判自体の核心は、「文化」状況の変化をもって一言の下に退けられるものでもないのだ。更に、主体の確立の問題として、現在においても有効な批判の基準として働き得るものでもあろう。こうした問題意識をより明快に表しているのが、次の一文である。

諸々の事実を媒介するものは、この事実を前形成し、掴み上げる主観的メカニズムであるというよりはむしろ、主観が経験し得るものの背後の主観に他律的な客観性である。この客観性は、第一に列せられる主観的な経験領域にとっては拒まれるものであり、その領域に先立っている。現在の歴史的段階の上に立ち、現行の言説に則って、余りにも主観的に判断されるところでは、主観は大抵、オートマティックに満場一致の事柄（consensus omnium）をただ機械的に反復するだけである。（ND 172）

この言葉が述べられているのは、「客観性による媒介」と題された節であるが、ここでの大意はカント哲学における「投入れ論」の意味するところの「主観の客観に対する媒介」に対する反論である。カント哲学では、客観（もちろん、物自体という意味ではなく）は主観によって構成されたものであり、主観による媒介を受けていることになる。しかしアドルノは、現状はその逆であると言う。媒介を受けているのは主観の方なのである、と。しかし、より重要なのはその「客観性」というものが「真の」客観ではないという点だ。ここでの「客観性」は、「満場一致の事柄」でしかない。アドルノの視点からすれば、そうした「客観性」による媒介を受けているにも拘らず、自我の確立を目指し、主体からしかものを見ようとはせず、[4]自我の内に閉じこもることで盲目化してゆくことにこそ問題はある。そしてこれが、文化産業の問題とパラレルであるのは言うまでもない。予めカテゴリーによって決められた通りに対象を構成することと、一般に受け入れられている事柄を機械的に反復するだけであること。そこにこそアドルノの批判的視線は向けられている。彼の批判は時代診断であると共に、対象構成的主観の確立への批判ともなっている。

この二重の意味を持つ「客観」による媒介という事態について、アドルノは次のように簡潔に述べている。すなわち、「主観が主観となることを妨げる、主観の中の客観化されたものの優勢は同様に、客観的なものの認識をも妨害する」（ND 173）。ここでの「客観」という言葉もかの重層構造を孕んでいる。「客観化されたもの」というのが、ここでの「満場一致」に相応するものであろう。その反対に「客観的なもの」とは、「真の」客観、すなわち「客観の優位」の意味での客観を指していると思われる。現代においては、主観は「客観性」＝「客観化されたもの」によって媒介されており、その

意味で「真の」主観ではない。だが、もちろん「客観による媒介」が問題なのではない。主観は客観に媒介されることが必然である。問題はその客観が「真の客観」ではない、という点である。更に、そうした趨勢によって主観の能力は委縮してしまい、[5]それが「真の」客観の認識を妨げていることだ。しかし、アドルノがそのために絶望するというわけでもない。「否定的なこと、つまり精神にとっては同一化を手段とすることでもって和解が失敗に終わったということ、その優位が成功しなかったということが、それ自身の脱魔術化の原動力に変ずる」（ND 187）と、同一性の哲学を打ち破る可能性を示唆しているのと同じことがここでの主観と客観の逆転、そして客観による主観の媒介についても言えるのである。アドルノは、そうした暗闇の内にこそ一条の光を見出そうと手探りする。

アドルノの時代診断は、誤てる主観の遍在（＝「客観性による媒介」）と主観の能力の委縮である。しかし、この現状がいかに牢固としたものであるとしても、この事態を凝視することにより、「和解」の可能性へ続く道は開かれるとアドルノは言う。否、そこにしか彼は希望を持つことができなかった。シェーマによってデータを静力学的に処理するとして実証主義を批判し、社会を突き動かしている動力学そのものを見据えなければならないというアドルノの姿勢は、ここから出来るのだ。[6]

さて、このようにアドルノが用いる「客観」は、様々な意味を孕んだものなのだが、それでは主観の方はどうであろうか。当然ここにも、「真の」主観と呼べるものがあるだろう。この強調した意味での「主観」という言葉を、次に吟味しよう。

3．「経験」について

アドルノは、「真の」主観について明快に述べてはいない。明晰判明な定義づけを避けて、間接的に対象に迫ってゆく、というのが彼の戦略だからである。しかしここでは、敢えてアドルノに逆らって、的を経験という観点に絞り、より判りやすい形で彼の主観概念を解き明かしてゆきたい。[7]

アドルノの主観概念はカントのそれとの対比の内でもっとも鮮明に浮かびあがってくるであろう。そしてこれは、主観の確立という問題、ひいては（主観の）同一性の問題を伴うものでもある。そこでカントとアドルノにおける主観の同一性についての相違を整理しておこう。

アドルノは、カントの有名な「我れ思うは私の一切の表象に伴い得なければならない」という命題における「私の」こそが、「我れ思う」という超越論的統覚を支えているのだと考える。アドルノが言わんとしていることは、端的に言えば次のように解釈できるであろう。すなわち、「我れ思う…」という論理的契機と「私の」という心理学的契機が相互補完的に絡み合ってこそ同一性は成立するのだということ、その結果、論理的普遍性を得る為にはどうしても、個別的自我の経験を経ることが余儀なくされる、という風に。そこで、次に「我れ（Ich）」と「私の（mein）」という二つの「主観」

の在り方を、特に後者の個別的自我を中心にして、論究してゆこう。

アドルノの議論はこうである。第一点。アドルノによれば同一性という術語は近代哲学の歴史における重要な意味として、「人格意識の統一、すなわち、一つの「我れ」がそのあらゆる経験において同一物として在り続ける」（ND 145）ということを表している。そしてこの統一を言い表すのが、カントの「我れ思う…」である、ということ。第二点。そこで同一性とされるのは、主観と思考対象、つまり客観とが相同であるということなのであり、それは単なるA=Aでしかない[8]、ということ。この二つの点によって、この「論理的普遍性は、思考についての普遍性として、それなくしては普遍性が成り立たないであろう個別的同一性に結び付いている」（ND 145f.）ということが明らかになったとアドルノはその議論を展開している。これをより具体的に言い換えるとこうなる。個別的意識、つまり「心理学的契機」によって生じるところの「個別的同一性」、すなわち時間継起を通じた一連の経験における個人の同一性が基とならなければ、「我れ思う…」という命題で表明される論理的普遍性は成り立たないのである、と。

「心理学的」意味での同一性についてはアドルノは、年老いた者が過去を思い出すというエピソードを持ち出して説明する。そこでは「想起される自我、かつてそうであった自我、そして潜勢的に再びそれ自身となる自我」（ND 157）は「ある種の他者、つまり他人（ein Anderer, Fremder）」なのである。そしてこれが「同一性の論理的問題構制の内にまで保存される」（ebd.）同一性と非同一性との相互並存として呈示される。

時々刻々と移り変わる瞬間瞬間の内に主観は存在するわけだが、現在の人格は過去の人格と完全に同一なものと見なすことができないとアドルノは言うのだ。継時的経験を通じて各人格が「同一性」を保つ保証はないのであり、そこに連続性があるにしても、過去の自分は他者とも言えるものとなるのである。統一を保っていながらも、もはや過ぎ去った還らないもの。同一でありながらも非同一なもの。このように、可能的経験というものが、純粋悟性概念の「客観的実在性が、唯一基づき得るもの」（A. 95）[9]に他ならないのであれば、そのことによって、超越論的主観の同一性は確固としたものであるという僭称が覆る危険に絶えず晒されていることになる。勿論、この「かつての自我」についての考量は特に目新しいものではない。重要なのは、それを内なる他者、内なる非同一性（あるいは客観と言ってもよいだろう）[10]として捉え返すアドルノの視角であることをここで確認しておきたい。つまりアドルノから見れば、主観はその優位を覆す爆弾を抱えていることになるのだ。「ある経験的な意識、すなわち生き生きとした自我のそれとの関係がまったくないのなら、いかなる超越論的な、つまり純粋に精神的な意識など存在しないだろう」（ND 186）。自立した主観なるものが、その安定を誇ることはもはや許されない。そしてここに、同一性の哲学を転覆させる微かな希望をアドルノは感じとった。

さて、こうしたアドルノにおける主観概念の二重性を念頭に置きながら、主観と客観の逆転という我々の問題に立ち返ってみてみよ

う。『ミニマ・モラリア』でアドルノは「主観的なものと客観的なものという概念は、いつの間にか完全にさかしまになってしまった」と語っている。つまり、「見識ある人々」が「主観的」と断ずるものは、「問題になっている事柄に特有の経験に踏み込んで行き、その事柄に関する判断上の合意を放棄し、対象そのものに対する関係を、対象を熟視したことすらない（まして考察したことなどない）連中の多数決に取って代える行き方」（MM Nr.43）であると述べ、しかしこれこそが真に「客観的なこと」ではないかと反問している。つまりは、ここで述べられたような「経験」に直面してゆく態度を採る主観こそが、「真の」主観と呼べるものなのである。

これまで我々が見てきたところによると、アドルノの「主観」概念には二つの側面があった。その二つは、カントの言葉を使うなら、「意識一般」とそれに対するアンチと解することができる。この後者は個人的経験に基づいた、一般に抱摂されることのない意識と言えよう。そしてこれこそが「真の」主観と我々の呼ぶものなのである。アドルノのテクストにおける「真の」主観という概念を理解するためのキー・ワードは「経験」[11]である。そしてこの経験に向い合うことによってこそ、「主観の優位」は、あるいは観念論、同一性の哲学は克服される、とアドルノは考えた。

しかしこの「経験」は、決して「科学的経験論の意味で使われるのではなく、すべての芸術的で知的な、経験したものへの反省をも含んだ、我々が日々経験するものの総体」[12]として用いられる概念だということを頭に入れておくことが必要であろう。つまり、主観と客観が共に重層構造に包まれた概念であったように、経験というのも二重の層を持った概念なのだ。そして「科学的」というレヴェルでの経験ともう一つの経験を、『プロレゴメナ』における「経験的判断」の領野に関わりつつ考察したのが、アドルノに多大な影響を与えたW・ベンヤミンの初期の著作である、「来たるべき哲学のプログラム」[13]だ。

カントの認識概念においてきわめて大きな役割を果していたのは、むろん高尚めかされてはいるものの、感官を介して諸々の感覚を受け取り、その感覚に基づいて自らの表象を形成している身体兼精神としての個別的な「私」という見方である。[14]

そしてこの「私」の「経験」というものは、「意味の零点、意味の極小値」[15]にまで貶められたものでしかない、とベンヤミンは考える。

身体と精神をそなえた個としての人間、ないしはそうした人間の意識へと関連づけて理解されるような経験、言い換えれば、認識が体系にもとづいて個別具象化したものとして理解されていないような経験は、いかなる種類のものであれ、やはり、この種の現実的な認識のたんなる対象にしか過ぎず、しかも、そのような認識の一分野としての心理学の対象にすぎない。[16]

我々は、ここでの「経験的」という形容詞に注目せねばならない。それについて、邦訳の訳者は、Erfahrungとempirischの訳語に関して註を添えている。後者については、こうである。「「経験的」と形容詞になった場合、それは、終始一貫してカント的な意味、すなわち、人間の感覚に基礎を置いた経験にかかわるという意味で、「純粋」ないしは「超越論的」という概念に対立するものとして、いわば中立的にしか使用されていない」[17]、と。しかし、Erfahrungとempirischということで思い浮かぶのは、カントが『プロレゴメナ』において、経験的判断（*empirisches* Urteil）を、知覚判断（Wahrnehmungsurteil）と経験判断（*Erfahrungs*urteil）に分けたことである。

知覚判断が単に主観的な妥当性しか持たないのに反して、経験判断は客観的な普遍妥当性を持つとカントはした。ベンヤミンの意図は、そうした「経験的」な意識、カントが最高次のものと看做したものが、実はまったく貧弱なものに生り果てていることをアイロニカルに表現することにあったのだろう。しかしカントの理論によって、経験的主観が完全に還元されるとは考えられていない。ベンヤミンはこう述べている。「事実カントは、とくに『プロレゴメナ』に顕著なように、経験の諸原理を、諸科学とりわけ数学的な物理学から引きだそうとはしていたけれども、もともと彼にとっては、経験それ自体は、そうした数学的な物理学の対象世界に一致するとは考えられてはおらず、そのことは、『純粋理性批判』をみてもはっきりうかがわれるところである」[18]。ベンヤミンが試みようとするのは、この本来カントに備わっていた筈の「永続的ではないとされていた経験の尊厳についての問い」[19]の復活である。経験的主観は「観念論」によって還元し尽くされたかに見えたが（少なくとも認識論のレヴェルでは）、そこから抽出された超越論的主観にも、実はそれに尽きないものが潜んでいる。つまり、超越論的主観の純粋性は保たれないのだ。そこには経験的主観の残り糟が在る。経験的主観は貶下されるとしても、それが完全に抹殺されるわけではないのである。

そこでアドルノに戻って、彼が経験の残滓について論述している箇所を見ておこう。『否定弁証法』の次の一節は、「所与ではない客観」と題されたパラグラフからの引用であるが、ここでの大意は先に我々が見たような主観の内の自己内他者としての「客観的なもの」の契機を浮上させることである。そこから認識論、並びにその流れの一つである経験論に議論は絞られる。ここではアドルノは、経験論の中にさえ「客観の優位」の一端を垣間見ている。素朴実在論を批判した経験論自身が「実在的」であることになる（Vgl. ND188）。しかし、ここで注意せねばならぬのは、その題目からも分かるように、経験論における所与、つまり感覚データとしてのそれが「真の」客観では決してないという点だ。

認識論の伝統に従えば、直接的なものは主観の中へと落ち込むのだが、それは主観の所与性、あるいは触発としての話なのである。なるほど主観は、自律的で自発的である限り、直接性に対する形

成力を持っている筈である。しかし、直接的に所与が端的にそこに在るという限りでは、主観はその力を決して持っていはしない。この直接的所与は、所与の形態の中にある種の客観的なものが抗って在り続ける（widerstehen）のと同様に、主観性の教説――「私のもの」についての、つまりその所有物としての主観の内容についての教説――が基づく、根底に存立しているもの（Grundbestand）なのであり、いわば主観の中の客観性の警告（Menetekel）なのである。（ND 187）

つまり所与に頼らざるを得ないという点で主観の自立は脅かされるのである。そして所与は客観から抽象化されて「極限値」（ebd.）にまで貶下されるのだが、それが在るという「その限りで、経験論は、諸々の事柄の感覚主義的還元にも拘らず、何らかの客観の優位を書き留めて」いるのだ。なんとなれば、「ロック以来、経験論は、感覚に由来しない、すなわち「与えられた」のでない意識内容など存在しないということを主張してきた」からである（ND 188）。しかしそうした所与は、超越論的主観が経験的主観の抽象物であったのとちょうど同じく、「客観」の抽象によってもたらされたものであり、「真の」客観ではない。経験論の主観も客観も、「主観」への還元により確保されたものでしかないのだ。認識論の二大源流であるカント的認識論と経験論は共に、主観への還元という点で一致するのである。

しかし、そのように残滓にまで萎んでいるとはいえ、それは確かに残留しているというのがアドルノの態度である。そして、そうした沈殿物でしかない「客観」をもって、アドルノは「客観の優位」を手探りする。経験論の中にさえ「客観の優位」を見るアドルノであるが、彼にとってより重要なのはカントとの対決であり、カント的な認識主観の優位を覆すことであった。しかし、アドルノはカントにさえ「客観の優位」のモメントを見出している。そこで次に、アドルノのカント批判を基に、アドルノがカントの内に見ている「客観」を究明しよう。それによって、アドルノの目指した「客観の優位」、ひいては彼の呈示する「和解」というものがどういうものなのかが浮き彫りとなるであろう。蔓延する超越論的主観（文化産業）、並びに対象構成的主観（カント哲学）への批判の果てに彼が辿り着こうとする地点を、そこで我々は見出すことになる。

4．「客観の優位」

超越論的主観に嵌入している経験的主観は、アドルノによって、「客観としての主観」とも表現されている。そこでこの言い回しから、アドルノの議論を追ってゆこう。

アドルノは、超越論的統覚における「我れ思う」と「私の」との対比の内で次のように語っている。

この「私の」が客観的なものの下の客観としての主観を指し示すのであり、またこの「私の」がなければ再び「我れ思う」が在り

得ることは決してないであろう。Daseinという表現が――それは主観と同義である――そのような事情を仄めかしている。主観が存在するということは、客観性から引き出されているのである。このことが、主観自身になんらかの客観性を与えるのだ。subiectumが、つまり根底に存立しているものが、哲学の術語によって客観的と呼ばれたまさにそのものを思い起こさせるのは偶然ではない。(ND 185)

主観が「ここに在る」ということが客観性から引き出されるとは、「我れ思う」(超越論的主観)が「私の」(経験的主観)から引き出されるとの謂いである。つまり、具体的な生き生きした経験において、主観は「真の」客観を経験しているのであり、そうした具体的経験によってこそ主観は成り立っている、というわけだ。だからDaseinには「何らかの客観性」が備わっている。主観が抽象的な普遍妥当的なものであるからというのではなく、それがここに在るという限りでそれは「客観的」なのである。このようにアドルノにとっては、存在するということが客観性を意味する。「主観性は何らかの仕方で「存在している」のだという各々の主張はすべて、…主観が初めて基礎づけると称する客観性をすでに含み持っているのだ」(ND 186)。ここで彼の言う「存在している」とはもちろん、観念的抽象的レヴェルで言われているのではなく、具体的経験を為すという意味での、実際に「ここに存在している」というレヴェルでの「存在している」である。それ故ここでの客観性は、1.で我々が見た「客観性」(満場一致の事柄)とは区別されねばならない。このコンテクストにおける客観性とは、「本質的に客観性であるもの、すなわち存在者」(ebd.)のことなのである。つまり、先の客観性は超越論的主観的なものだと、ここでの本質的な客観性は経験的主観的なものだと言い替えられ得る。アドルノにとってみれば、主観とは必然的に客観でもあるのだ。主観は、それ以外のものと隔絶して独立して在るのではない。

ここで、主観―客観という両概念についての哲学史上の解釈を振り返りつつ、アドルノの議論の補完としたい。アドルノがわざわざsubiectumという言い方をしているわけが、それによって明らかになるだろう。

アドルノが主観―客観にこだわったのも彼の一つの思想的バック・グラウンドとなっているヘーゲルに由来すると思われる。主観と客観とのそのダイナミックな変転を捉える視線をアドルノに与えたのはヘーゲル弁証法であると言えるだろう。以下では、哲学史上の主観、客観という両概念の説明としてE・フィンクの『ヘーゲル』を足掛かりにして議論を進めたい。

主観(Subjekt)は本来、アドルノもそう述べているように、subiectumとして根底に在るものを意味していた。フィンクによれば、「存在者、物、実体がSubjectであり、subjectumである、…諸物において一定不変なもの、すべての変化を通り抜けて、その変化の根底にあるもの、つまりhypokeimenonそれがsubjectumであり、実体(Substanz)と同じである」[20]。そして客観の方は「もともと

はむしろ自我的なものを意味する――objectumとは自我にとって投げられたもの、自我に対置してあるものである」[21]

しかしこのような主観－客観の概念は時代と共に変化してゆく。近代的な意味でのそれらの概念の確立のきっかけとなったのは、キリスト教的世界解釈とデカルト哲学の登場であるとフィンクは述べている。すなわち、「キリスト教的解釈では、被造存在者、ens creatumは他のものによっての存在者になり、己れの自主性、己れの即自存在を失う。デカルトは有限な実体をres cogitans考える実体とres extensa延長せる実体とに分けて、この分割を不動の基礎へ還帰するということで根拠づける。そしてこの揺るぎない基礎とはデカルトにとっては、どんな疑いのなかにあっても疑いえないものとして保持されるもの、すなわち自我の自己確信である。疑いのなさというこの方法的な優位によって、自我が際立ったヒュポケイメノンに、簡潔な意味での「主観（主体）」となる」[22]。

この変化を通じて、元来、物（存在者）であった主観が自我的なものになり、自我的なものであった客観が物（存在者）的なものとなる。

フィンクによれば、「物」というものには――近代的意味での、つまり「客観」になるのだが――二つの側面がある。ひとつは普遍的なものとしての本質という面であり、もうひとつの面は個別的なものとしての事実性である。前者は概念把握可能であるが、後者は不可能である。何故なら、前者について言えば、本質というものがそもそも概念によって捉えられたものなのであり、「私の思考と同種」[23]だからである。後者については、それが「概念に抵抗して、ただ「発見され」、「経験され」、確認され、受け取られるだけ」[24]のものだからである。

主観は存在するだけですでに客観である、とのアドルノの勘考は、主観の本来の意味――subjectumとして存在者であり、物である――から鑑みれば正当であることが分かる。そのような元々の意味が彼の念頭に在ったに違いない。「obiectumはsubiectumではない。しかし、subiectumはobiectumであるというのなら話は別だ」(ND 181)。「観念論」が思いなしたのとは違い、主観がすでに客観であるならば、主観はもはやその全能を誇ることは許されない。且つ、フィンク言うところの物に在る二つ目の側面、つまり主観には概念把握することの不可能な側面が、物＝客観に在るのなら尚更そうである。

ここで、我々は興味深い事態に立ち至ることになった。それというのも、アドルノと最も対照的な人物として名を挙げられること暫しである、ハイデガーとの意外な一致がここに存するからだ。ハイデガーにおいては、世界内－存在である人間は、道具的指示連関を通じて、日常的－実践的には常に既に「存在」に出会っていることになる。現－存在は、本来的には「存在」を「了解」しているわけである。こうした思想と、本性上存在者的なものであるが故に「客観」でもある主観というアドルノのそれには、図らずも共通点が存しているのだ。

ここでハイデガーについて充分な論考を為すことはできないが、

ハイデガー以前にも、こうした「客観」は哲学の主題であった。その代表としてカントの「物自体」という概念が挙げられるだろう。

カントもやはり、この客観性の優位という契機を自らに思い止まらせて済ますことができなかった。彼は理性批判において認識能力の主観的分析を客観的な意図から舵取りすると共に、頑強に超越的物自体を守った。即自的に在るものはある種の客観の概念に端的には矛盾しないだろう、ということは彼には明らかだった。…彼のもとでも主観は自身の外へ達しないのに、やはり彼は他性の理念を犠牲に供しはしない。この他性がなければ認識はトートロジーへと零落するだろう。認識されたもの（といってもそれは認識自身であろう。（ND 185）

このように物自体を確保する限り、カントの観念論にも一抹の「客観の優位」のモメントが内包せられていることになる。よく知られているように、カント哲学においては物自体の経験的実在性は保証されている（もちろんその実在性も仮想体でしかないのだが）わけであり、経験を通して超感性的なものを「感じ」得るという点でアドルノは、物自体の「経験的」実在性というカントの教説に忠実である。しかしこのモメントはフィヒテ以来嫌悪され（Vgl. ND 190）、カントの後継者たる新カント派はそれを削除する方向に動いた。これを復活しようとすることに我々は、アドルノのカント批判の一面を見ることができる。そしてここから「唯物論への移行」が始まることになる。しかし、当面の我々の取り組んでいる問題にとって重要なのは、客観に依存しなければならない主観がその自立を脅かされているという点である。

一九六四年のH・マルクーゼの七〇歳記念の講演においてアドルノは、根源的統覚（超越論的統覚）と物自体という二つの概念を使って次のように語っている。「見かけ上は非依存的なもの、つまり根源的統覚は、たとえ無規定的であっても客観的であるもの――それはカントの体系では経験の彼岸の物自体に避難するものであるが――に対して依存」（GS10 601）しているのだ、と。しかし、アドルノが自律までをも棄てるわけではない。「自律的に、だがやはりその都度ごとに予め描かれた問題と接触することをできるだけ避けてその問題を反省しながら、かの経験を確保すること」（GS10 605）[25]、これこそが哲学の使命であると彼は考えているからだ。

哲学は経験を通じて「客観の優位」に進み行く。「経験する主観は、非同一性の中で消え失せることを目指す」（ND 190）のである。つまり「客観の優位」とは主観が自立を棄てるということであり、それは主観が自らに命ずること（自律）によって為されるのだ。

そしてこの「客観」を言い当てたものとしてアドルノはカントからもう一例挙げている。それは『第一批判』弁証論中の「純粋理性の理想」において、存在論的証明の批判としてカントが持ち出した有名な例である。カントは、デカルトが為したような「概念」からの神の「存在」証明に対して、現実の百ターレルと可能的な百ターレルという例をもって反駁する。カントの説明はこうである。概念

上は「現実の百ターレルが可能的な百ターレル以上のものを些かも含むものではない」（A.599 B.627）が、現実上はこの二つでは事態はまったく異なるというのだ。存在論的証明なるものは、「自らの状態を改善するために、その現金残高にいくらかのゼロを付け加え」（A.602 B.630）ようとする商人のようなものであるとカントはその反論を締め括っている。

カントの論証は、神の存在を、神は無制約なものであるとの命題から引き出すことはできないという論点に限られたものである。それをアドルノは敷延して考える。客観の実在は概念によっては説明し尽くせない。これをカントの論証は内含するとアドルノは言うのだ。「…想像上の百ターレルについてのカントの範例の論証力は、『純粋理性批判』自身の形式－内容の二元論にぶつかり、更にそれを遥かに越える力を持つ。…概念も事実性も互いの補完のための付加物ではないのだ」（ND 189）。概念によって客観の実在が掴めないばかりでなく、事実性といっても、それは現象でしかないのだから当然、実在としての物自体（アドルノが言うところの客観）ではない。「世界の中のいかなるものも事実性と概念から組成される、いわば足し算されるものではない」（ebd.）。概念と事実性が互いに補完し合っても世界の内の具体的「客観」を解き明かすことはできないというわけだ。

更に、アドルノはこの批判が、プラトンにおける叡智界（ここでは概念）と感覚界（同じく事実性）とによる世界の説明以来続いている、「観念論」における、多様性と単一性による世界観を突き破るものであると論を進める（Vgl.ebd.）。

ここで言われている概念は純粋悟性概念［演繹論］であり、事実性は現象［感性論］であろう。これをプラトンの叡智界（一なるもの）と感覚界（多様なもの）と等置し、存在論的証明の批判［弁証論］を足掛りにして、カントの理論構成自体に非同一性に向かい得る思想を見て取るというアクロバティックな議論運びをアドルノはしている。このように恣意的に好き勝手に都合の良い箇所だけを取り上げているかのように見える議論に、我々は戸惑いを感ぜずにはいられないが、問題は概念（カテゴリー）をもってしても「客観」＝非同一的なものを掴み上げることはできないし、その概念と現象を足し算しても答えは「客観」＝非同一的なものにはならないということを、カント自身の存在論的証明の批判の中にアドルノが読み取っていることだ。しかしアドルノが、彼一流の読み込みによって、パラドキシカルなことにカント自身の内にカントを越える契機を掘り起こしたことだけが重要なのではない。そもそも物自体が不可知であることはカントも認めるところなのだから。我々にとってそれ以上に注意を払わねばならないのは、アドルノが非同一性をどういうものとして捉えていたかが、ここに暗示されていることだ。つまり「客観」＝非同一的なものとは、概念と事実性によっては汲み尽くせないもの、叡智界と感覚界に代表されるような「観念論」の問題構制[26]から「隠されているもの」なのである（Vgl.ND 189）。

しかしアドルノが、わざわざプラトンの例を挙げたのは、それが観念論の問題構制の典型であるというだけのことなのだろうか。こ

う考えることができはしないか。この例を引合いに出すことによって、アドルノは非同一性がどういうものであるのかを、これと異なった形で我々に教えてくれているのだ、と。叡智界と感覚界の例はカテゴリーと現象に対比するためばかりではなく――存在論的証明の批判が「純粋理性の理想」において説かれていることを考えれば分かるように――、真理とその模写という模写説にも関わって用いられているのではないか。つまり、叡智界と感覚界とは分断したものであり、真理とその模写という対立図式で表わせるとのプラトンによる世界理解を、理想（カントによれば一切の現象のプロトタイプであり、「一切の可能性の総体」（A.573 B.601）である）とその派生物（プロトタイプである理想の模写）というカントの思想と等置してもいるという風にである。このような解釈が許されるなら、ここにアドルノとカントの近接性を読み取ることができるかもしれない。一切の現象の原型であり、一切のものはその模写であるにも拘らず、主観が掴み上げることのできないものとカントによって定義づけられる理想。経験を通じて接触していながらも主観には「隠されたもの」にとどまるとアドルノが構想した非同一的なもの。しかしもちろんこの両者は同一視されてはならない。何故なら、カントの理想というものは「はるか遠く客観的実在性から隔たった」（A.568 B.596）ものなのであり、アドルノの「非同一性」はまさに実在的なものであるからだ。[21] こう考えるとプラトンを持ち出すことの意味が見えてくる。つまり、それによってアドルノは、非同一的なものが、そうしたカント的理念――理想とは個別的な理念である（Vgl. ebd.）――の意味での「理念」とは決して取り違えられてはならない（Vgl. ND 189）ということを指摘しているのである。

ここに二つの解釈が可能であることが明らかになった。恐らくアドルノはこの両者を共に意図的に組み合せているのであろう。ここでそれを整理しておく。前者の解釈の力点は、純粋悟性概念「演繹論」に置かれる。それは、概念によっては実在を捉えることができないという存在論的証明の批判を、カテゴリーでは客観が掬い上げられないことに置き換えるものである（ここではプラトンの例は消極的な意味しか持たない）。後者の力点は、理想「弁証論」に置かれる。それは、プラトン的イデアとカント的理想とをパラレルなものと看做すものである（プラトンの例を敢えて取り上げた理由はここに存する）。この解釈に応じて非同一的なものにも二様の説明が為される。前者においては、それは観念論の理論構成から「隠されたもの」である。後者においては、それは観念論的「理念」とは同一視されてはならないものである。「非同一性は「理念」であることは決してなく、ある隠されたものなのである」（ebd.）とのアドルノのテーゼはこうした二つの解釈を経て初めて理解できるものであろう。

このように「客観」は主観の知り得ない原因であり、それ自身は主観の能力によって構成することができない（現象としてしかそれは対象ではないのだから）ものであるとアドルノ＝カントは考える。それではいかにして主観は客観と関わるのか。アドルノは、主観は

客観に己が身を委ねなければならないと言う。彼はこの身を委ねるということをヘーゲルの＜zusehen＞ということでもって説明している。「主観は現実には客観を『ただ眺めやら』ねばならない。それというのも、主観は客観を創造するのではなく、認識の格率とはその傍らに立つということだからである」(ebd.)[28]。つまり「客観の優位」というのは、主観の客観に対する依存性に直面し、客観＝対象を構成するのではなくその「傍らに立つ」だけで満足しなければならないということである。

何故アドルノが、対象を構成する主観という「観念論」の主観概念を忌避しようとしたのかというと、対象の構成ということに彼が暴力的な契機を見たからである。なんとかして非暴力的に対象と関わる道がないものか、在るとすればそれはどういうものか、まさしくそれを探ろうとしたところに、アドルノの視点は置かれていた。その解答こそが、我々がここで見てきたような「客観の優位」なのである。主観は、「観念論」が思いなしたように、自立したものではない。「観念論」は客観＝対象を構成すると考えるのだが、実はそこから溢れ出るものがあり、それに気付くことにより、観念論的「主観の優位」は唯物論的「客観の優位」に反転してゆく。そこでは主観はただ客観の傍らに立ち、それを眺めるだけである。哲学とはこのような姿勢を保たねばならないとアドルノは考えた。

5. 結語

ここに、主観、客観、経験という三つのアドルノ読解のキー・ワードを我々は手にしたことになる。しかし、現代の様々な思想が提起している問題は、主観－客観の図式よりも、言語や身体などといった主観と客観を媒介するものへの転換を呼びかけるものである。この点、確かにアドルノが主観－客観という図式を固持するために、時代遅れの謗りは免れない。だが、この媒体に注目する考えが出て来たのも、近代的自我の崩壊を目の当たりにしたからであった。それ故、たとえ主観－客観という二項対立図式を用いているにしても、アドルノの目論見が、独立した主観なる僭称を覆すことに在ったとするなら、この現代的な問いと核心部分では共有する点があると言えるであろう。また、本稿で明らかになったように、アドルノ自身の用いる主観－客観が互いに入れこになっており、単なる二分法では決してないのであるから、それを近代的な主観－客観図式として簡単に片づけられないことも明らかである。アドルノ自身は内在的批判として、観念論の使用する二項を存分に使いこなし、内から掘り崩しを図ったのである。彼の主観哲学批判、並びにそれと平行して繰り広げられる文化産業批判は、その根底に在る「主観への還元」批判という点で、つまり主観に尽きないものが主観には在る――客観にも同じことが言えるのだが――ということを主観という概念を用いて内在的に批判してゆくという姿勢において、現在でも尚、有

効であると言えるのではないだろうか。

以上見てきたようにアドルノの哲学は、客観の優位という点では、すべてを絶対精神に回収してしまうヘーゲルよりも、物自体というカントの構想に近接性がある。他方、認識を超越論的主観の内部に限定する静態的なカントの理論哲学よりも、動態的なヘーゲル弁証法に拠るところが大きい。主観、客観、経験のみならず、カントやヘーゲルに向かい合って見せるアドルノの複雑な態度を我々は見究めねばならない。彼の著作を読む際には、「その度ごとに対象に従事するという苦行」（ND 171）を引き受けねばならないのだ。そうして初めて、彼の言わんとしたことが見えてくるであろう。

注

本文中の引用の指示は以下の通りである。

GS: Adorno, Th.W., *Gesammelte Schriften*—巻数と頁数を記す。

ND: Adorno, Th.W., *Negative Dialektik* (Bd.6 der GS)—頁数を記す。

DA: Adorno, Th.W./Horkheimer, M., *Dialektik der Aufklärung* (Bd.3 der GS)—頁数を記す。徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店、一九九〇年。

MM: Adorno, Th.W., *Minima Moralia* (Bd.4 der GS)—節番号を記す。三光長治訳『ミニマ・モラリア』法政大学出版局、一九七九年。

PS: Adorno, Th.W.u.a., *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*, Frankfurt am Main 1989—頁数を記す。城塚・浜井・遠藤訳『社会科学の論理』河出書房新社、一九九二年。

カント『純粋理性批判』からの引用は版と頁数を記す。

＊

本稿は、修士論文「無限への憧憬」（平成6年度大阪大学）Ⅱ章に手を加えたものである。

（1）「社会科学の論理によせて」には次の記述がある。「体系と個別性とは相互連関的であり、ただ両者の相互連関性においてのみ認識され得るのだ」（PS 127）。

（2）これは、「事態は、命題をいくつか結びつけた輝ける体系的統一に対して反抗するものである」（PS 126）、「座標系を自由に選択できると想定することは、客体の偽造へと転化する」（PS 128）、等々という言葉で示される。

（3）ニーチェによって背面世界論者の弄ぶ概念だとして罵倒されたWesen、そしてその相関物であるUnwesenという対概念をアドルノは確保し続けようとするわけである。しかしWesen（伝統的には、理念のごときものとされる）とUnwesen（同じくそれの模写でしかない）という二分法を用いることは、直ちに観念論への退行とはならないだろうか。同様の嫌疑が、「全体性の神話」に弁証法理論が囚われているとの批判によって、その全体性概念についても掛けられているのだが、これに対しアドルノは、実証主義科学の方が弁証法理論よりも観念論的だと反論している。すなわち、「観念論に対する勝者であると自負している実証主義的諸理論は、批判理論よりもずっと観念論に近い」、それというのもそれが「認識主観を実体化」、つまり「すべての妥当の、科学的制御の知性界として認識主観を実体化」（PS 12）しているからである、と。

（4）こうした従来の哲学の主潮流をアドルノは「のぞきからくりの形而上学（Guckkastenmetaphysik）」と呼んでいる。『否定弁証法』

に次の記述がある。

「西洋の形而上学は、その異端を除いては、のぞきからくりの形而上学であった。主観…は、そうした形而上学によって、永遠の間それ自らの神格化に対する罰として自らの自己の内に閉じ込められた。塔の銃眼を通して見るかのように、主観は観念あるいは存在という星の掛かっている漆黒の天球を覗き見るのである」(ND 143)。

(5) これについては、例えば「想像力の委縮」ということが挙げられるであろう。『啓蒙の弁証法』には次のような記述がある。Die Phantasie verkümmert.(52f.); Die Verkümmerung der Vorstellungskraft und Spontaneität...(148); Die Einbildungskraft (ist) verdrängt.(ebd.)

また、それに絡んだ問題として、アパティアを挙げることもできよう。カントにおいて義務とされたアパティア――それは感情や衝動等などの理性による克服なのであるが――は、アドルノにとって見れば生き生きとした経験の抑圧に繋がる。彼は『啓蒙の弁証法』において、ジュリエットの「自己訓練」(115)や「良心の呵責からの自由」(ebd.)とパラレルに、カントのアパティアを論じている。

(6) 静力学と動力学との対比については以下を参照されたい。Vgl. *Über Statik und Dynamik als Soziologische Kategorien* (GS 8)

(7) もちろん「真の」主観の解明、そしてそれに伴う「客観の優位」の究明に必要なのは経験にとどまらない。想像力、身体(の受苦)、記憶(想起)などがそれである。本稿はカント的二重体としての主観に焦点を絞った関係上、「経験」というモメントだけしか取り上げることができなかった。これは今後の課題としたい。

(8) アドルノの議論におけるA=Aというのは$S=O$という意味である。つまり同一性の哲学における対象は予めカテゴリーを介して構想されたものでしかないというのである。客観=対象は、主観が作り出したものなのである。同一性の哲学においてObjektとされるのは、抽象化された、自分と等しくなったものだけである。

(9) 本文はこういうものである。「ア・プリオリな諸純粋概念があるなら、それらは、なるほど何ひとつとして経験的なものを含みえないことは言うまでもないが、それにもかかわらず可能的経験のア・プリオリな純然たる条件でなければならず、この可能的経験が、それらの諸純粋概念の客観的実在性がそれのみにもとづきうるものにほかならない(eine mögliche Erfahrung..., als worauf allein ihre objektive Realität beruhen kann)」(傍点引用者)(A.95)。ここでは純粋悟性概念の客観的実在性が可能的経験に基づくとはっきり表明されるわけだが、カントの本意としてはこれは、「可能的経験と連関しないア・プリオリな概念は、概念のための論理的形式」(A.95)でしかないという洞察からの発言なのであり、すべての経験の根底にはア・プリオリな条件として純粋悟性概念がひそんでいる(A.96)ということの表現なのであろう。しかしこの言を真に受けるなら、最終的なカントの結論が超越論的統覚と生産的構想力が連関して初めて認識が可能になるというものであるにしても、可能的経験なしには我々はそれらのア・プリオリな条件を知り得ないし、パラドキシカルなことに、可能的経験によってこそ超越論的統覚と生産的構想力の客観的実在性は保証されるとなりはしないか。そう言っても、歪曲すること甚だしいカント理解であると非難されることはないと思われる。可能的経験こそが、そしてそれを経験する経験的主観こそが超越論的主観を支える「真の」主観なのである。ここに(しかもカント自身の言葉によって)超越論的主観の脆さが露呈されている。

アドルノによる『第一批判』の読解はB版の問題構制しか取り上げていないように思える。A版を解読することで我々は、アドルノ自身の気づかなかった、カントとの近接性をそこに見出し得るかも知れない。しかし、そうした早計な判断は避けるべきであろう。この問題に取り掛かるためには、カントのみならず、アドルノとは因縁浅からぬハイデガーの『カント書』にも手を出さねばならず、現時点では十分に論ずることができない。これは今後の課題としたい。

(10) 「真理における非同一的なものとしての客観」という言い方をアドルノは「主観と客観について」で為している。Vgl.GS10 S.753

(11) M・ジェイも、アドルノがその内在批判の不十分性を補うために必要とした超越的支点の一つとして「経験」を取り上げている。Jay, M., *Adorno*, Cambridge 1984 p.117（木田元・村岡晋一訳『アドルノ』岩波書店、一九八七年、一七八頁）参照。

(12) Többicke, C., *Negative Dialektik und kritische Ontologie*, Würzburg 1992 S.48

尚、アドルノにおける経験概念についてばかりでなく、彼のテクストにおける主観の二重性についても本書の議論は大変参考になった。

(13) この論文のタイトルは、カントの『およそ学として現われ得る限りの将来の形而上学のためのプロレゴメナ』の変奏となっている。

(14) Benjamin, W., *Gesammelte Schriften* II-1., Frankfurt am Main 1977 S.161（道籏泰三訳「来たるべき哲学のプログラム」『来たるべき哲学のプログラム』晶文社、一九九二年、一〇一頁）

(15) *A.a.O.*, S.159（邦訳、九七頁）

(16) *A.a.O.*, S.162（邦訳、一〇二頁）

(17) 『同書』、一一八頁

(18) Benjamin, W., *A.a.O.*, S.158（邦訳、九五頁以下）

(19) *A.a.O.*, S.158（邦訳、九五頁）

(20) Fink, E., *Hegel*, Frankfurt am Main 1977 S.193（加藤精司訳『ヘーゲル』国文社、一九八七年、二八一頁）

(21) *A.a.O.*, S.194（邦訳、二八二頁）

(22) *A.a.O.*, S.194（邦訳、二八二頁以下）

これは哲学史のレヴェルでは、スピノザ主義とデカルト主義という二つの潮流で説明できるであろう。スピノザの汎神論によれば、唯一の実体は神であり、主体は単なる「偶有性」でしかない。デカルトにおいては主体も実体である。

(23) *A.a.O.*, S.196（邦訳、二八五頁）

アドルノにおいては本質とは、ここでフィンクの言うような「思考と同種」の概念把握可能な物としては捉えられない。アドルノは「本質」にも多様な意味合いを持たせて用いており、その解明にはヘーゲルとの関連からの詳細な議論が必要とされる為に、本稿では充分に論ずることができなかった。

(24) *Ebd.*

(25) ここでの、対象と接触することをできるだけ避けながら対象と関わるというその関わり方は、Konstellation――それは元々ベンヤミンのタームなのであるが――としてアドルノによって表現されるものである。それは、彼が言語に模して次のように語っていることの内でよく言い表されている。

「言語は、認識機能にとっての単なる記号体系を差し出しているだけでは決してない。言語が本質的に言語として現われるところ、描写となるところでは、言語は己れの諸概念を定義しはしない。言語はそれらの概念にその客観性を得させるのであるが、それは、ある事柄に中心を置いて、言語が据える諸々の概念の関係を通じ

てなのである。…ただKonstellationだけが、外部から、概念が内部において切り離してきたものを、つまり、概念ではかくありたしと希いつつも、そうあることができない剰余を、表現するのだ。諸概念は、認識され得るであろう事物の周辺に群れ集うことによって、潜在的にそれの内部に在るものを規定し、思考が必然的に己れ自身から削除したものを思考しながら手に入れる」（ND 164f.）。

こうした思考は――それは「像を欠いた唯物論」という言葉にも端的に当てはまるわけだが――ユダヤ教の「図像化禁止」の命令に対応して生まれたのであろう。ユートピアを求めるにしても、決してそれを図像化してはならないのだ（Vgl.ND 207）。

これは余談だが、こうしたアドルノの図像化による偶像崇拝に対する嫌忌について前出のTöbbickeが、「英米の皮肉家たち」のエピソードを紹介している。それはこういうものだ。「嘲弄家たちはこう言い囃す。諸々の概念の実体化、すなわち偶像化や崇拝（英語では、adoration）に対するアドルノの批判は彼の名前と連関しているのだ、と。英語の発音はそれとぴったり合う。"Adore? No!"」(Többicke, C., *A.a.O.*, S.58)。

(26) このような純粋精神の圏域と現実との対置こそが観念論のポジションであるとのTöbbickeの言及がある。Vgl.Többicke, C., *A.a.O.*, S.112

(27) 「主観と客観について」には次のような記述がある。「非同一的なものは、脱魔術化された叡智界の遺物では決してなく、感覚界よりも実在的である」（GS10 753）。

(28) ＜zusehen＞（観望）は『精神現象学』におけるヘーゲルのタームであるが、ここで述べたようなアドルノの思考と非常に近い考え方をしているのは、A・コジェーヴのヘーゲル解釈である。すなわち、「弁証法は、ヘーゲルにおいては、思惟や叙述の方法とはまったく異なったものとなっている。或る意味で、彼は哲学的方法としての弁証法を放棄した最初の人間であるとすら言うことができる」（Kojève, A., *Introduction à la lecture de Hegel*, Paris 1974 p.455上妻精・今野雅方訳『ヘーゲル読解入門』国文社、一九八七年、二五八頁）。「弁証法」は対象を思惟したり、叙述したりするのではなく、その「傍らに立つ」のである。

（尚、本稿での引用は邦訳のあるものはそれを使用させていただいたが、文意上、一部変更した箇所もある）

Subjekt, Objekt, Erfahrung
— Zur Tragweite der Philosophie Adornos

Makoto KAWAHARA

Der Kritischen Theorie Adornos wird oft ihr elitärer Charakter vorgeworfen. Dabei wird im Allgemeinen auf Adornos Ausführungen über die Kulturidustrie Bezug genommen. Sogar wird als Argument für den obsoleten Charakter von Adornos Theorie die Tatsache herangeführt, daß er sich bloß innerhalb des von ihm gesetzten Rahmens von Subjekt-Objekt-Problematik bewegt. In der vorliegenden Abhandlung möchte ich mich gegen dieses landläufige Adrono-Verständnis wehren.

Die Quintessenz der Kritik der Kulturindustrie liegt nicht nur in der Zeitdiagnose Adornos. Seine Ausführungen basieren auf einer subtil-dialektischen Aufdeckung der Problematik, die sich aus >Aufklärung< ergibt, die sich von Kant bis zum Positivismus erstreckt. In diesem Zusammenhang wird auf den von Adorno aufgedeckten Doppelcharakter in der Kantschen Begründung des transzendentalen Subjekts eingegangen. Damit versucht Adrno eine Dechiffrierung von Kant, die andeutet, wie man den sogenannten Vorrang des Subjekts aufsprengen kann.

Die Gedankenführung von Adorno ist bekantlich äußerst komplex und nur mühsam ablesbare. Ich beschränke mich deswegen darauf die angedeutete Thematik anhand des Begriffs >Erfahrung< zu entfalten. Denn gerade in diesem Erfahrungsbegriff hat Adorno mit eigentümlich mehrdeutiger Diktion den >Vorrang des Objekts< erfahrbar und die Möglichkeit der >Versöhnung< spürbar zu machen versucht

Key Words

Th.W.Adorno, Subjekt, Objekt, Erfahrung, Kulturindustrie